

平成28年度 青少年問題調査研究会 第3回議事録

日 時：平成28年11月11日（金）14:00～16:30

内閣府政策統括官（共生社会政策担当）付青少年企画担当

司会 様々な各省庁が施策に取り組んでいるところでございますし、官民の様々なレベルで積極的な取り組みがさせられているというように承知しておりますけれども、専門の支援機関においては、支援を必要とする人が相談に来てくれるのを待つだけではなくて、こちらから支援を必要とする人のところにアウトリーチしていくことも重要であるところでもあります。

今回は、こういうような視点も含めまして、学校の段階で個別の様々な困難な状況を把握して、さらに深刻な状況に陥る前に支援をしていく。こういった活動を行っていらっしゃるNPO法人パノラマの「ぴっかりカフェ」の取り組みを通して、困難を抱えている若者たちにどのような支援があるのかということについて考えていきたいと思っております。

それでは、講師を御紹介させていただきます。NPO法人パノラマ代表理事兼「ぴっかりカフェ」マスターの石井正宏先生です。

石井氏 よろしく申し上げます。

司会 続いて、神奈川県立田奈高等学校学校司書（副主幹）、NPO法人パノラマ理事でもあります松田ユリ子先生です。

松田氏 よろしく申し上げます。

司会 本日の流れですけれども、最初に松田先生から「NPO法人パノラマによる『ぴっかりカフェ』の実際」というテーマで約30分程度を目途としてお話しただいて、続いて、石井先生から「『ぴっかりカフェ』の意義と展望」というテーマで約1時間程度お話をいただく予定です。その後、休憩を挟みまして4時半までの残りの時間、フロアとの質疑応答をやっていきたいと考えております。どうぞよろしくお願いたします。

それでは、早速ですけれども、松田先生のほうからお話しいただきます。よろしくお願いたします。

「NPO法人パノラマによる『ぴっかりカフェ』の実際」

神奈川県立田奈高等学校学校司書（副主幹）/NPO法人パノラマ理事 松田 ユリ子氏

よろしく願いいたします。ほとんど最初のパートは写真集となっておりますので、このスライドのほうを御注目いただきたいと思います。

「ぴっかりカフェ」、図書館でやるカフェといっても一体どんなものなのかという、想像を超えたものだということにおそらく思われますので、最初にそのイメージをつかんでいただきたいと思っております。

これはぴっかり図書館です。私が6年前に田奈高等学校に赴任しまして、そのときに何かブランディングをしないと生徒たちにアピールできないなと思ったのでブランディング、まず名前からというように思ったのですが、そのときに、もう4月1日の時点で図書案に足を踏み入れた瞬間におりてきた言葉が「ぴっかり」だったのです。だから、もうぴっかり図書館で行こう。どんな会議でもぴっかり図書館という名前でもらうようにして、それが功を奏して、最近では「ぴっかり」という言葉が田奈高生の間では非常な多義語になっていまして、1つは図書館を指すこと、1つはカフェを指すこと。「今日、ぴっかりある」という感じですね。もう一つは、司書を指す言葉。「あ、ぴっかりさんだ」みたいな。またほかにもいろいろあったのですけれども、そんな感じで定着してきたな。これはブランディングが成功したなと思っております。

そこにカフェがオープンするとなったときに、迷わず名前は、何の議論もしなかったのです。「ぴっかりカフェ」となりました。毎週木曜日を大体基本にしていて、その昼休みと放課後に図書館の中にポップアップ的にカフェが出現するということになっています。いろいろなNPO法人パノラマが学校の中に入ってきてカフェを運営するというので、資金的なことは全て寄附。最初はクラウドファンディングで資金を集め、そこから毎回寄附、皆様の寄附によって運営を進めています。

石井氏 いいですか。田奈高校からは一切もお金をいただいているはずではないですか。

松田氏 ここがポイントです。

そして、こんな感じで図書館のカウンター前にカフェの日にはカップとかおわんが並びわけです。メニューボードを見ながら、生徒たちは、今日はこれ、一応1人1杯というルールがあるので、何がいいかなとすごく選びながらいますけれども、奥のほうにカウンターをしつらえまして、普通に図書館の閲覧机をL字型に並べるということで始めたのですけれども、それがそのまま定着して、一番簡単ですね。それまで勉強していた机をカウンターにするということで、こんな感じになります。もう昼休みが始まってしょっぱなの時間、20分間ぐらいはもうボランティアさんも含め、顔を上げられないぐらいの、はい、はい、はいという感じの状況が最近続いています。たくさんのボランティアさんたちにその都度来ていただきながらやっています。

カップに自分のオーダーを書くのですけれども、それだけではなくて名前を書いてもらうというのがポイントでして、この名前、誰のオーダーかを把握するためなのですけれども、それ以上にボランティアさんや石井さんがその子に「はい、ヒトミちゃん、できたよ。ココア」という名前を呼んであげるといことで信頼関係をつくっていくことを目指しています。

当初は飲み物だけのつもりだったのですけれども、もう最初の日から家庭科の先生が手作りのクッキーを差し入れてくださったりして、もう何か食べ物があるのがデフォルトになってしまっていて、今ではおてらおやつクラブとかいろいろな仕組みがあるのですけれども、そういう食べ物もたくさん毎回いただくという状況でやっています。このように名前が書かれているのですが、そのうち、このカップアーティストが出てきまして、もう毎回、褒めれば褒めるほどスキルアップして行って、このキャラクターにぴかりちゃんという名前がつくほどになりまして、Facebookをご覧になっている方には有名人だと思いますが、このように毎回写真を撮らないと自分のオーダーを取りに行かないというぐらい、石井さんを探すのです。写真を撮らないととって。そのうち、その才能は「ぴかりカフェ」に還元したいなということで、メニューボードにこういうようにキャラを描いてくれたりとかそういう参加の仕方をしてきています。

カフェにして、やはりそれまでよりも利用者の裾野が広がったなということは感じています。広がり過ぎて、席が足りません。授業で使うために、一応40人の席というのは絶対に確保したいと思っているのです。ですけれども、席がないなということでジベタリアンが生じていて、もともと司書室、私が事務をする部屋には生徒も境目なく入ってくる状況をつくっているのですけれども、こちらはこちらでぎっしりで、もう苦肉の策の最近は、このレジヤシートが大活躍。本の森の中にピクニックなのですかね。いろいろなところから足がよきによき出ています。多いときは300人近い生徒が1日やってくるということで、昨日は261名でした。文化祭で2週間、2回分間があいたのです。だから、とても久しぶりだったのですごい熱気でしたよね。もうすごかったです。

お配りした資料にもこの表がありますけれども、昨年度、カフェは39回行われ、生徒延べ来所者数は5,220名となっています。ボランティアさんに支えられているのですけれども、ボランティアさんも131名ということで、どれだけの人がかかわってくださったかということがよくわかるというように思います。

「ぴかりカフェ」の特徴としまして、先生方がたくさん来てくださるということがあります。そして、生徒と出会い直す、いい顔をする。生徒も教室で出会っている、どれが教師かみたいな感じかな。最近の先生は若いからね。私たち、このカフェというアイデアを考えたときに、大阪の校内居場所カフェ事業を参照したのです。でも、それとの違いというのがありまして、大阪の場合は空き教室でカフェをやっているのですけれども、そこには教師は来ないでほしいということで、生徒がアジールとして逃げ込む場所。学校があまり居心地の良くない場所、そういう場所だとしたら、そこから逃げてほっとする場所と

というようなことでおそらくつくられていると思うのですけれども、田奈高校の場合は、もともとが学校自体を生徒がほっとできる場所というようにつくっている中で、生徒を支える仕組みとしてのほんの一つとして「ぴっかりカフェ」があるので、そこに先生方も本当に来て生徒たちの様子を見てもらいたいと思いますし、生徒も教師が大好きなので、本当によくかかわってくださっています。カフェを毎回楽しみにしている先生方もいて、同じようにおみそ汁を飲んでいるよね。

これはキャリア支援センターの事務局長をしている金澤という教師なのですけれども、彼がこの仕組みを今、統括していて、カフェというアイデアも金澤が考えたという感じですが、こういうカフェの中で生徒の悩みを聞いたりということもしています。

何のために図書館でカフェをやっているのかということなのですけれども、1つには、大きな目的は交流相談というものです。このカフェ、図書館というオープンなスペースに支援者が生徒たちと自然な形で出会うという仕組みを交流相談と呼んでいるのですけれども、このように普段は雑談しているような子が、あるときには、ふと将来の不安を漏らしたりする。そうすると、すかさず石井さんが、このカードで自分でどんなことに興味があるのか見てみるかというような感じで、これは何というカードでしたか。

石井氏 これはバリューカードとか自己理解カードとかと言われる15個の自立性とか他者への影響力とか、そういうものを書いてあるカードを超大事、まあまあ大事、どうでもいいに並べかえてもらって、並べかえながら1位から5位まで順番をつけてと、何でこれが大事なのかという話をしていくと、そういうものがあるとすらすら自分のことを語り始めて、初めて点としてではなくて面として自分の夢を語れたみたいな感じで、話し終わると当たっているみたいな、占いではないのですけれども、占いを受けたような大当たりしたみたいな気持ちで去っていく子たちが多い。

交流相談だから、この相談をしている風景を他の生徒が見ているのです。何をやっているのと近づいてきて、次、私もやる、次、私もやるという形で生徒たちがやっていく。そうすると、前の子が並べた並べ順、前の子が一番要らないと言ったカードが私は一番大事だったりとかすることによって、他者理解とか自己理解が進んでいったりとか、この形は何々ちゃんばいと思う、めっちゃばいとか言いながら自己理解が進んでいく。それを満たすものは進学したほうがいいのか、就職でもいいのかな。そこを3年生になるまでにちゃんと考えておこうねみたいな形でお話をしています。

松田氏 ありがとうございます。

こんな感じで、右奥の子が3年生で、とてもとても今、就活の最中で、不安で不安でしようがなく、いわれもなく廊下で泣いてしまっているところを私が捕獲して、今日、石井さんが来ているからちょっと来ないと言って連れてきたときに初めて石井さんとじっくり話したのですけれども、これはその後の写真なのです。その後、もう何か不安だったら図書館に来て、石井さんがいれば石井さんに話をすることなのなのですけれども、このときは求人票の見方。

石井氏 求人票の見方もそうなのですから、4枚ぐらい求人を持ってきて、美容系と何かアパレル系だったかな。2種類ぐらい持ってきて、高校生は最初一社しか応募できないのです。一人一社制。就職協定と言うのですけれども、その問題については今日触れませんが、どこを最初受けるかということですので、私はこの前の週に泣いている彼女にそのバリューカードを実施していたから、前回やった感じで言うところらなのではないみたいな話をしている。

それをそちらから見ると手前の子、私には関係ないみたいな感じで付き合いでそこにいる感じなのだけれども、やはり耳を澄まして聞いているのです。君はもう決まったのかと言うと、実は手前の子のほうがいりいな課題が噴出してきたりだとかして、まだこの子、手前の子の相談は受けていませんけれども、もしもその子が困ったときに、あの子が相談していたように私もあの人に相談しようというのがこのときにインプットされると思うのです。そういうことがすごく重要なのかな。

すぐその場で何かが始まるのではなくて、傍観者でいられる時間。いきなり個室に私がいたら、先生に連れてこられたら、もう有無を言わず相談が始まって私はどうしたんだいとか言うわけではないですか。そうではなくて、この人にはどうしたんだいと言われてもいいかどうかというのを決められる余地を残しておくみたいな、そういう待ちの支援をしている感じですね。

松田氏 まさに交流相談、「ぴっかりカフェ」で、おもちゃで遊んでいる子たちの奥のほうでバリューカードをやっているこの風景がいつもあるのですけれども、きっとこの子たちだって意識の隅に絶対入っているなと思います。

一般的な個別相談と交流相談の違いというのは、今まで説明したとおりなのですけれども、特に、いわゆる個別相談、個室で支援者が待っている場合というのは、やはり顕在化した課題への対応になってしまうということなのです。もう先生方がその子に課題があるなというのがわかっていて支援者につなぐというパターンでしか支援者は生徒と出会えないです。

一方で、この交流相談ですと、本人も自分に課題があるということがわかっていない生徒というのが、支援者と普段から接して出会っていることによって発見される。潜在的な課題に対応できるというところが一番違うというように思っています。

石井氏 田奈高校は課題集中校と言われているのです。ほかの言葉で言うと教育困難校とか言われています。そういう学校の先生たちは、この顕在化した課題の対応だけで、たばこだとかけんかだとか、そういう特別指導だけでも追われているのです。そうすると、ちゃんと学校には毎日来ているのだけれども、発達障害で実は授業がさっぱりわかっていないみたいな子たちが置き去りにされていたりとか、あるいはちゃんと来ていてテストの点数はとるのだけれども、家がぐちゃぐちゃみたいな状態の子たちというのは、先生たちは気付にくいし、気付いても手当てをする時間がなかつたりとかするのです。そういう子たちが実はずっとクラスの中で順番待ちをしているのです。先生が暇そうだなと思

って、ちょっといいですかと言うと、ごめん、今、忙しいからと断られている。そういう断られているうちに順番が回ってこないで潜在的な課題を抱えたまま卒業してしまって、社会に出てその問題が顕在化したときに非常に大きな問題につながってってしまう。それを図書館で私たちが潜在している状態のときに、早期発見、早期支援という言葉がありますけれども、そういうことを実現していく。

もう少し、こういう場だから言うと、例えば顕在化しているだけで大変ということは、先生たちがそれだけで手いっぱいなのに、さらに私たちはパンドラの箱をあけるように子供たちの問題を顕在化させてしまうということは、先生たちの仕事も当然増えていってしまうわけなのですね。では、そこに対して人材がちゃんと手当てされているかということもそうということもなく、先生たちの努力の中でしか今、解決していないわけです。NPOと学校が連携するといいいよねとよく言うけれども、NPOが学校に入っていったら必ず問題をあぶり出してしまいます。そのときの先生の大変さに対してどういように加配の手当てがされているのかということまでをしっかりと文部科学省の方たちが考えておかないと絵空事になってしまうし、先生方はNPOが来るのが迷惑というようになってしまうのです。

だから、この辺を田奈高校は腹をくくって総力戦でやってくれていますけれども、そうでない学校はNPOが来ると大変なことになるといようになっていってしまう。なので、今日、この形を見ていいなと思ったら、いいなで終わらせないで、それに対してどういように人的な配置をしていくべきなのかということまで、この研究会では深めていただけるといいなというように感じています。

済みません、熱くなってしまいました。

松田氏 熱いですね。そうなのです。それで田奈高校は支援教育という意味ではやはり相当進んでいる学校だと思うのですけれども、まず、これは卒業生なのです。卒業生が「びっくりカフェ」に来ているところなのですけれども、これはたまたま来るといってもあるのですけれども、しっかりとうたっているのは、田奈高校のキャリア支援センターは、カフェも含めて卒業生も対象にしているということなのです。だから、卒業生たちも来ていいということをよく知っているわけなのですね。そうでなくても学校が大好きなので、本当に卒業生はよく来ます。この間などは、この間の3月に卒業したばかりなのに4カ月の赤ちゃんを連れて子がいきなりあらわれまして、お母さん方、いっぱいここにいるからどんどん抱っこされて、ちょっとでもほっとした時間をこの子が、この生徒が過ごせたかなと思うのです。

石井氏 ちょっといいですか。この抱っこしている方たちは、地域のNPO、うちとは別のNPOの方たちで、スペースナナさんという方たちなのですからけれども、月に1回、最終週をコラボ運営ということでやっています。この赤ちゃんを取り上げて、気付いたら赤ちゃんを寝かしつけていてお母さんに楽をさせてあげようということをやっているのですけれども、このナナさんたちは子供食堂みたいなこともやってらっしゃるので、何かあったら食堂においでみたいな話をしているとか、あと私たちも木曜日にカフェがあるからまたおいでな

どという話を、来ればベテランのお母さんがいっぱいいるからね、聞けるよなどという話をしている。学校に来たのにサードプレイスの人と出会える。セカンドプレイス、サードプレイスの人に出会うという仕組みを私たちは2.5プレイスなどという見方をしているのですけれども、地域と学校の間にあるスペース、こういうのはすごく重要なことなのかなと感じています。

松田氏 おとといですか、2人、やはり子連れで女子生徒が2組連れ立って来ていましたけれども、本当に久しぶりに会った卒業生なのですが、2人ともシングルマザーだと言っていました。やはり田奈高校は、シングルマザーになってしまう子たちが多いなということを感じています。

このように、これは卒業生でリピーターです。よく今働いているところの状況なども報告しがてら石井さんにいろいろ話を聞いてもらいにやってくる。

また、彼は、生徒であるときは、私の部屋を自分の部屋のように着替えに使ったり、もう本当に楽しそうに図書館を使っている生徒だったのですが、めでたく鉄道関係の会社に就職して、今回車掌になれたということで挨拶に来ていて、カフェで鉄道関係に入りたい現役の生徒にいろいろレクチャーしているところです。レクチャー内容もね。

石井氏 レクチャー内容は耳を澄ましたら、大きい声を出せ、とにかく大きい声を出せ、大きい声を出せば大丈夫だから。全然アドバイスになっていないような。

松田氏 ということですね。卒業生がカフェに来てボランティアのほうに回ってサーブしてくれるというようなことも起こっていて、彼女などもずっと支え続けて大変な生徒でしたけれども、就職して時々戻ってきたり、辞めてしまったと行ってまた支援されて、また就職したよと言いに来たり、そういう生徒ですね。あるいは近くの日体大生になった子なども、自分のお友達を連れて、近いですからカフェを手伝いに来るなどということがあって、生徒がまた卒業して今の生徒を支えるような循環もできているというのがいいなと思っています。

交流相談ということで始めたカフェですけれども、やはり文化的シャワーを浴びせる場所としてもすごく有効だということが続けていて思いました。生徒などはレコードとか初めて見るのです。それから、石井さんのお友達のアマチュアDJのイケメンが来ればJKがきゃぴきゃぴという感じですし、イケメンの支援者がいれば女子高生はきゃぴきゃぴという感じで、ウクレレというアイテムは大人気。

そして、何よりも最近のトレンドはスムージーです。このオオニシさんという方は、ボランティアに1回来たらはまってしまって、こここのところ毎回来てくださっていて、彼はその都度何か自分にチャレンジしていて、子供たちが今まで味わったことがないおいしいものだけでも、それでやったおいしいと言われたいというチャレンジを毎回していて、いろいろ変わったものにもチャレンジしていて、最初のスムージー、大人気だったのですけれども、あるとき、地域のイタリアンレストランからいただいたブドウを使って何かできないかということで、チョコレートブドウスムージーというのをやったらものすごい不

評で、そのときの落ち込み方は半端なかったけれども、その次のときにはもっとおいしいものをつくってくるということで頑張っているボランティアさんなのです。

そのオオニシさんは、最近はこちらかというJKのカメラマンになっていることが多いです。写真撮って写真撮ってと、パパと言われている。このようになりますね。

あと文化的シャワーという、コーヒーを豆からひいて入れるなどということや茉莉花茶とかね。

それから、いろいろな視察の方が来るのですけれども、どこの学校にもある茶道部、田奈高にもあります。茶道部、作法室でひっそりとやっていて一般の生徒にはあまり知られていないと思って、この機会にまた外国の方々にティーセレモニーを人気だからやってみるかといったら、初めてこうやってカフェでやってくれたのです。それで自信をつけて普通のときにやってくれるようになって、子供たちもお点前なんて敷居が高いからなかなかお作法室に行けないけれども、ここで体験できるみたいなこともあります。

あとこれはハッピーバースデーとスタンプされているスペシャルカップなのですが、実はこのカフェでは誕生日の人はバースデーソングを歌ってもらえるのです。石井さんがこんな感じで歌ってくれるのです。それを知っているから、彼女は今日、私の誕生日なのだとして自己申告して歌ってもらったんです。そしたらその後、「こんなふうに祝ってもらったのは初めて」というように言ったのです。

彼女、今やウクレレでハッピーバースデーのコードを石井さんから伝授されて、この間来てくれたボランティアの人が、彼女にハッピーバースデーを歌ってもらったと言っていて。誕生日だったのですか？と聞くと、いや違うのですけれども。この子はハッピーバースデーしか弾けないからとりあえずそれを弾いてあげたというように言っていて、そのボランティアさんも喜んでいました。

石井氏 今は「恋するフォーチュンクッキー」を弾けます。上達しています。

松田氏 進化していますね。

あるいは地域の方にいろいろな講師として来ていただいています。お菓子教室の先生にアイシングクッキー作りを教わったり、あるいはガールズトークイベントをやったりしました。出産したばかりのNPOパノラマ理事の鈴木さんに赤ちゃん連れで来てもらって、ぶっちゃけ育児はどうよ、出産はどうよみたいな話を女の子だけです。石井さんは離れたところから耳ダンボですけれども。

あるいは田奈高にはすごく酸っぱい夏みかんがあるのですが、これを何とかおいしいジャムとかにするということで、もう本当のプロフェッショナルに来てもらって一緒にジャム作りをしてみたり、カレーパーティーも定番になりつつあります。

去年のカレーパーティーでは、先ほどの鉄道関係に勤めた彼が、「肉は俺に任せろ」と言って、期待して買ってくるのを待っていたら、全部ウインナーを買ってきてということがあったりしてね。そこに30年前だったかの卒業生がFacebookの書き込みを見て、急に何のアポもなくたくさんの寄附を持っていらしてくださったのです。そして、みんなでその

後、図書館で卒業アルバムを見て確認したりして。

このように日本全国いろいろなところから食材をいただいてカレーパーティーが実現したのですけれども、今年はさらに前日ともなるとこのように事務室が寄付の食材でてんこもりになり、地域の方がこういうように家庭菜園でつくった野菜を持ってきてくださり、もう食材はより取り見取りでした。急遽、単につくるのではなくて、班に分かれて好きな食材でカレーをつくり、コンテストをやろうということになりまして、管理職3人はもう本当ひいひい、おなかいっぱいになるぐらい各班のカレーを味見して、どれが一番だったかというのを決めてもらったのですけれども、大変盛り上がりました。このときの黒板も見ていただければ、書き切れないほどの方々からいろいろなものをいただいてこれできたということです。

夏はカレーパーティー。多分これは恒例になると思うのですけれども、ハローウィンはジャク・オー・ランタンをつくるみたい。これは本当にこの子たちやり切るのかと思っていたのですけれども、すごい集中力で中をくり抜いて本当にランタンをつくれたのですが、実は彼、何でこんなに頑張ったかという、最後、かぶりたかったのです。でも、頭が入らないというような落ちがありました。

去年やったクリスマスパーティーです。調理室でケーキをつくる先生が、手順を説明するとき、ほかの授業だったら、ちょっと聞いてくれない？とお願いしなくてはいけないような子たちがものすごい集中力で話を聞いてこのようにおいしいケーキをつくりました。ターキーをぜひ食べてもらいたいとおっしゃって、地域の方が丸ごと焼いて持ってきてくださるということがありました。今年も期待が高まっています。12月22日にやります。

こうしたことは、カフェの2つ目の目的である「文化的シャワー」の話なのです。「びっくりカフェ」を通して、人という文化もたくさん入り込んできています。もちろんボランティアさんもそうなのですが、たくさんの取材を受けるようになりまして。取材を受けている石井さんがいますと、それを見る。あるいは生徒自身がマスメディアの取材を受けるというようなことも経験していく。これも立派な文化的シャワーを浴びることかなと思っています。

石井さんと同業の支援者の方々に、こういう場をどのようにつくっていくのかというお話を石井さんがするとか、あるいは教育学部の学生さんたちには、本当に来てほしいなと思っているのですけれども、そういう学生さんたちや、神奈川県立高校の新採用教員は必ず他校を訪問する日があるのですが、そういう新採用の教員たちが見に来て学ぶような場にもなっています。

石井氏 ちょっと今のところでいいですか。年間に130人以上の方がいらっしゃっているのですけれども、田奈高校は頭髪指導をしていないので、写真を見ていても茶髪、金髪、いろいろな髪の色の子がいて、カラコン、つけま、すごいのですけれども、そういう子たちは地域の人たちから見るとすごく怖い存在だったりだとか、例えばごみをポイ捨てするような子がいるような、駅前で騒ぐような子たちがいたりだとか、しかも地域が横浜市の

青葉区というビバリーヒルズみたいなエリアにある老舗の課題集中校というところですが、ごく相性が悪かったりとかするのです。

田奈高校というようにアルバイトの応募の電話で言っただけで電話を切られてしまったなどという生徒も結構いたりするのです。地域に悪いうわさが都市伝説的に、廊下にバイクが走っているとか、私が田奈高校に来る前に学校に授乳室があると聞いていましたけれども、見学して授乳室どこですかと言ったら、そんなのあるわけないではないかと怒られたのですが、そういう都市伝説的な悪いうわさが流れている。

この人たちはパノラマの寄附者の方を招いたときの写真なのですが、130人の人が学校に来て130人の人が地域に戻っていくわけです。来れば生徒はいただきますとかありがとうとかごちそうさまとかちゃんと片付けて帰っていく子たちもいるし、とてもかわいらしい人懐っこい子たちなのです。そうすると、みんな大人たちは子供たちにほだされて、田奈高校が気になって帰っていくわけです。そうすると、地域で田奈高校の悪いうわさが出たときに、それは昔の話で、最近の田奈は随分変わっているよ、クリエイティブになってこういうようになってNPOなども入っているのだよなどという話をしてくれると、学校のブランディングが変わってくると思うのです。最終的に生徒が田奈高校と電話したときに、では会ってみようかな、田奈高校の子を雇ってみようかなというところまで、この活動でボランティアさんが延べで1,000人になりましたなどといったときには、学校の古いレッテルみたいなものを刷新することが私たちによってできるのではないかなというところまで考えてやっています。

松田氏 ボランティアさんと語る生徒たちというのは、もう日常なのですけれども、すごくどちらがおばちゃんかわからないような感じで、あるいはPTAの取材ですと来たPTAのお母さんたちなども、そのままカウンターに入れてしまうのが石井式なので、とにかくやってみないと本当の意味がわからないといいますかね。これは学生さんで、女の子たちに大人気です。田奈高校はいろいろなやり方でいろいろな機会学習支援をしているのですけれども、そういうところでなくても自発的に教わりたいなと思ったときにそこにいる大学生のお姉さんに教わるとか、そういうことが起こっています。

あるいは最近人気のボランティアさんはお着物で来ていただいている方で、彼女もすごい人気がありますし、あと先ほど出てきたスペースナナの方たちは、月一ですけれども、もう定番の顔になっていますので、子供たちと本当に近い関係ができています。もう気付くところのように本の陰で相談が始まっていたり、お勉強を教えてもらっていたりということが自然とボランティアさんとの間でできている。

そのスペースナナさんが地域でフェアトレードのファッションショーを開くとなったときに、ぜひ田奈の子たちにモデルに出してくれないかと言ったのです。わりかし部活動ならまだしも、そういう自主的な気持ちで外に出て行って何かやらないかということにすごく抵抗感がある子が多いのです。学校の中では元気なのだけでも、実は声をかけてみるとなかなかできないという子が多い中で、このときは声をかける人への信頼感も非常に大き

かったと思うのですけれども、地域でのこういうイベントに出てくれたのです。大成功で、このように石井さんもランウェイを歩くという。DJはやはりお友達のDJで盛り上がりました。

そのファッションに目覚めた子たちが図書館にファッションのすごい棚をつくってくれたのです。私は生徒にたくさんリクエストしてほしいなと思っているのです。ある部分は生徒たちのほうが私よりも絶対にアンテナが立っている部分があるのです。だから、そういうところは教えてほしいなと思っていて本をリクエストしてもらおうのですけれども、それに応えていると、例えばとてもすばらしいファッション棚ができていく。そのファッション棚を参照して、実は今度は文化祭で自分たちでファッションショーをやりたいという子たちが出てきて、このようにデザイナーとモデルがいろいろデザインの相談をしたりということが毎日のように図書館で行われたのです。いろいろあったけれども、この間の文化祭で実現できたのです。ランウェイをつくって、いろいろな衣装を身にまとった子たちがその上を誇らしげに歩きました。びっくりカフェのボランティアさんたちが、衣装作りで面倒を見てくださったり、DJをしてくださったり。

これが文化的シャワーなのですからけれども、この「びっくりカフェ」のロゴ、びっくりということを含めて点々点々なのですが、もう一つ意味があって、これはシャワーの穴なのです。これが「びっくりカフェ」のロゴ、文化的シャワーということになっています。ここで相当時間をオーバーしていますけれども、いいですか。

石井氏 いいです。そのまま行きましょう。

松田氏 このまま一緒にかけ合いながら言っていていいですか。

なぜ図書館かというところをあまりお話ししていないかなと思うのですが、図書館だからいろいろなメディアがあります。当然本がありますし、漫画もたくさんありますし、修造カレンダーもありますし、こういうようにいろいろな掲示物がありますね。そこに自分で描く絵というものもあります。こういうものも全てメディアというように捉えることができると思うのです。ポスターもありますし、先生方の写真、お勧めの本を持った先生方の写真や映画のチラシなどももうめっちゃくちゃに貼ってあるのですけれども、あとは百人一首。これは今ブームです。子供たちの一部でブームで、非常にたどたどしい詠み手と楽しそうにやっているのですけれども、あとはこういういろいろな石やパズルみたいなものを置いているのですが、そういうものもいろいろなメディアと言えらると思う。そういうように多様なメディアがあるところが学校図書館であるということが1つ。

図書館では、カリキュラムに沿って探究的な授業を日々支援をしています。いろいろなおもしろい授業を図書館では展開しています。ぬいぐるみを抱っこしながらやると学びが進むらしい。このようにリラックスした中で学んでいくということが図書館ならできるわけなのです。

いろいろな授業の成果物も図書館の廊下に貼ってもらっていて、こういうものも生徒が目にするメディアと考えることができます。実際、生徒たち、ただ来るだけで何

かしら見ているのです。昨日は、本当にそんなこと絶対言いそうにない感じの女の子が、授業の帰りに新聞コーナーを見て、「トランプばかり」と言っていて。それを聞いて、「俺らこれからどうなっちゃうの?」とか、「暗殺されちゃうんじゃない?」とか、そんな政治的な話題が近年あったかなというぐらい、生徒が話しています。様々なメディアに触れるということが、図書館に来ればいながらにできるということがあります。

「ぴっかりカフェ」で交流相談をやって、発見された課題はどうなるのかという、ここがまた非常に重要なのですけれども。石井さんが個室のゆっくりしたところでがっつり話を聞くという「どろっぴん」という仕組み2週間に一遍やって、課題の解決までを担っています。

「ぴっかりカフェ」がこのように、実は校内外のネットワークの新たな結び目になっているということを感じるわけです。学校というものは学年という組織が非常に大きいです。そして、1学年、2学年、3学年のそれぞれの島があるのです。それぞれの交流というのはなかなかなかったりするので。

そのほかに校務分掌が学習支援、生徒支援、キャリア支援、活動支援というように分かれていますけれども、ぴっかり図書館は活動支援の中に入っているのです。ですけれども、この「ぴっかりカフェ」はキャリア支援担う仕事なのです。

「田奈ゼミ」ですとか「多文化交流会」とか「教育相談コーディネーター」とか「キャリア支援センター」とか、こういったものはそれぞれの校務分掌がになっている子供たちを支える仕組みです。こんなにたくさんあることもこの学校はすごいのですけれども、「ぴっかりカフェ」のように、どの組織に位置付けたらいいかがはっきりわからなくなってしまうようなものがあることによって、例えば学習支援の田奈ゼミのNPOカタリバさんたちが、何か図書館で学習支援やったほうがよさそうなのですけれどもというようなことが起こったりしてくる。当該組織ごとには校外との結び目はあったりするのですが、校内がいろいろな意味でつながっていくというのは高校レベルになると実は難しかったりするので。校内でもぴっかりカフェを通して、連携の形が見えはじめている感じがしています。

学校の中に図書館はこういうようにあるけれども、実はそこからものすごく広いところにつながっていきける可能性があるなど今やっていて感じるのです。生徒の自立を支援するためのプラットフォームとしてのぴっかり図書館ということが言えるのではないかなと思っています。

そして、生徒の自立を支援するということを図書館の立場から言うと、それは情報リテラシーを育むということなのです。必要な情報にアクセスできて、それを活用して自分の生活を自立させていって立派な市民になるということは、情報リテラシーを持っているということなのです。それが、学校図書館が究極的に目指している教育支援なのです。やってみてわかったのですけれども、この「ぴっかりカフェ」という仕組みがなぜ図書館にあるのかということがなかなかわかってもらえないのですけれども、実はちゃんと見ていくと全然齟齬がないというように私は思っていて、これはもっと敷衍的にほかのところでも

情報リテラシーを育む場所としての学校図書館を追求する1つの方法として考えることが可能かなと思っています。

全ての人をフレームインするパノラマです。ありがとうございます。

司会 ありがとうございました。

もう既にいろいろお話に入っただいていますが、では、次に引き続いて石井先生、
お願いします。

石井氏 今のところまでで質問とかないですか。大丈夫ですか。

松田氏 大丈夫ですか。

「『ぴっかりカフェ』の意義と展望」

NPO法人パノラマ代表理事兼「ぴっかりカフェ」マスター 石井 正宏氏

石井氏 私、前に出て話をしていますか。ちなみに今、松田さんが話をしたようなことをおとといぐらい、他の高校でお話をしてきたら、廊下ですれ違ったときから嫌な感じがする先生だなと思っていた先生に、図書館での飲食をノーと言っている先生はいないのかという質問を、何か質問はありませんかと言ったときに手を挙げてされていたのです。私はそういう直接の場には出ていないけれども、松田さんが言うには、職員会議にちゃんとかけたけれども、関心がないのかもしれないけれども、誰もノーとは言わなかったということ言ったら、ふてくされた感じで座っていましたね。いいのですけれどもね。

巻き込んだアウトリーチということをお話ししていきたいと思います。

松田さんと資料がかぶるところがあるので飛ばすところは飛ばしますけれども、私はもと東京都福生市にあるNPO法人青少年自立援助センターという、今メジャーな感じで言う育て上げネットさんという立川にあるNPO、工藤啓君のお父さんがやっている法人で、10年間ひきこもりの若者の支援をしていました。家庭訪問も全国にしていって、ひきこもりの子のいる部屋のドアをロックして、最終的にドアをあけて本人に寮に入ってもらおうという支援を10年間やっていたのです。10年間やっていて私のやっている自分の仕事というのが天井からぼたぼた落ちてくる雨漏りにバケツを置いてそれを受けとめる支援ではないかなということを感じたのです。

10年間ずっとぼたぼた落ちてくる雨漏りを見ていると、どこから漏れている、どこから落ちてくるか大体わかるようになってくるのです。それが普通科学力下位校と言われているような田奈高校だったりだとか通信制高校だったり定時制高校だったり、あるいは少年院を出てきたような子供だったりするかもしれないし、御家庭に貧困があるとか、何らかの課題のある子たちが社会との接点をつくれなくてぼたぼたと落ちてくる。それをバケツで拾っていく。今、39歳を若者というようにやっていますけれども、39歳ではもうバケツが足りないのではないかと。42歳ぐらいまでに広げなければいけない。バケツをもっと大きくしようよという議論があるわけですが、バケツを大きくするというのは税金によってコストをかけるということですね。そんなことをしていたら、もうこの国で社会保障が潰れていってしまう。そうではなくて、雨漏りのするところを塞げばいいのではないかと、予防支援をしようということで2009年に会社を立ち上げて活動をしています。

ちなみに、対処型の支援というのをわかりやすく言うと、虫歯になったら歯医者さんに行って虫歯を治すのが対処型の支援。予防支援というのは、毎日ちゃんと歯を磨きましょうねというのが予防支援というように思ってもらえるとわかりやすいかなと思います。

そして、毎年毎年15万人近い高校生。この15万人の内訳は、進路未決定者。大体5万人

近く。それと中退者、これも毎年5万人ぐらい。2万人弱ぐらいがフリーターとして卒業している。そして、3万人ぐらいは就職したのだけれども、早期に離職している若者。そういう子たちを全部足すと15万人ぐらいになるのです。これは私の計算ですので合っていないかもしれませんが。根拠はちゃんとありますけれどもね。15万人。

どんなにバケツを大きくふやしても15万人が毎年落ちてくるのです。この15万人をでは5万人まで減らしましょう、なくしましょうという支援をしないと、若者支援というのはいつまでもエンドレスになっていってしまう。この15万人に対する支援は今のところないのです。なぜなら、まだ困っていない人だから。ただ、この人たちはこれから困るリスクの高い人たちなのではなくて、今、困っていたから勉強ができなくなってしまって課題集中校に入っていきようになっていくということが背景にあるのです。なので、既に困っている人たちなので、ちゃんと支援しましょう。でも、その支援の予算は今のところどこにもついていないというのが実際です。

進路未決定になりやすい生徒の特徴というのを田奈高校の前の校長先生から聞いたお話ですけれども、女子生徒、片親、生活保護世帯、この3つの層の若者たちが進路未決定になる。この3つに共通することは何だかわかりますか。

では、トットキさん。むちゃ振り帝王。この3つに共通することは何でしょうか。時間切れです。時間が押していますので、済みません。

この共通することは、子供が選べなかったことです。子供は自分が男の子に生まれたいとか女の子に生まれたいとか選べないし、両親がそろっている家に生まれてきたいとも選べない。生活保護でない家に生まれてきたいとは選べないわけです。今日リストを見たら足立区の方が何人か来てらっしゃいましたけれども、私は足立の若者サポート・ステーション立ち上げにかかわっていて、福祉課の方と協働して足立区の生活保護世帯のニート状態の若者の家に自転車で回って家庭訪問をしていました。

最初に会った若者がパンチパーマをかけていて、私のところにどかっと前に座って言った一言は、ああ、何で私はこんな家に生まれてきてしまったのだろうなと言ったのです。お母さんに聞こえるように。なぜかお母さんみたいな人が2人いる家だったのですけれども、そのとき私は思いました。あなたの言うとおりでなと。あなたがもしも隣の家に生まれてきていたら私の前にこうやって座っていなかったら。どこの家に生まれるかによってその子の人生が決まってしまうという格差の時代に入っているのがあるわけです。足立区の生活保護などは世襲制と言われていて、親子3代が生活保護を受けているなどということがあ。安倍政権を批判するわけではありませんけれども、その当時が前安倍政権の時代で、キャッチコピーを覚えているかもしれませんが、前の政権のときのキャッチコピーを覚えていますか。再チャレンジなのです。

私は足立区中を自転車で走りながら再チャレンジの安倍さんのポスターを見ながら思いました。この子たちは一度もチャレンジさせてもらえていないのに再チャレンジは何だよ。この子たちにちゃんとチャレンジさせてあげる仕組みを持たなかったら、この国はおかし

いのではないかということをごく思いました。その仕組みをずっと考えたいというようにその当時、私の中でスイッチが入って、貧困という問題に対する支援をしっかりとやりたいというように感じたのがその足立区の時でした。

課題集中校と言われているのですけれども、私が学校に入って感じることは、課題集中校ではなくて格差集中校。ちなみに3人に1人のお子さんがシングルマザーの御家庭の子というように学校からデータで聞いています。ただ、先ほど松田さんが紹介してくれた「どろっぴん」という個別相談を私が受けていると、3人に2人はシングルマザーの御家庭です。どういうことかということ、片親になれば課題を抱えやすいということなのではないかなと思います。格差が集中してきている。格差はどういうことかということ、自分では抗いようのない問題を抱えてしまうことが格差ですね。それを個人の責任にするとか自己責任とかで怠けとかではなくて、それを社会がどのようにフレームインしていくのかということがとても重要なことではないでしょうか。

私がひきこもりの若者支援をずっとして、何で私が田奈高校であんなことをやっているかというお話ですけれども、これは川のイメージです。上流から若者がどんどん流れてくるという川のイメージです。サポート・ステーション、横浜ではユースプラザ、いろいろな支援機関がありますけれども、流れてくる若者たちをキャッチする中州のような場所。私はこの中州のような場所の子たちをずっと支援しているわけですが、日本は働いてお金を稼ぐか、あるいは福祉の中で手帳とか生活保護にひっかって福祉的に支えてもらうか、どちらかでしか生きようがないのです。ベーシックインカムがあるわけでもない。そうすると、この中州にたどり着いた子たちをどちらかの岸に移動させてあげなければ、この子たちは生きていくことができない。これは制度のはざまの子たちというように言えるかもしれないですね。おそらく社会福祉の枠を広げて行って福祉の岸をより行きやすいようにするということは多分ないのです。難しいのだと思うのです。そうではなくて、雇用の岸にどうやってたどり着かせるかということがとても重要で、今日お話ししませんけれども、パノラマが取り組んでいるバイターンというのは、その移動可能性を高めるための支援だなと思っています。

ちなみに、この中州にたどり着くのはごく一部の若者で、圧倒的多数は流れて行って反社会的な行動をとったり自殺してしまったり一家心中してしまったりしていくという状態があるかと思います。私はここにいながらどこからこの子たちは流れてくるのだというのを見ると、教育機関なのです。学校。なので、私は川上に上って行って学校の中で支援をしようというように思って会社を立ち上げたりNPOを立ち上げたりしている。

この流れてくるのが先ほど言った15万人で進路未決定者や中退者や早期離職者で、教育と雇用の接続を果たせなかった子たちが流れてくる。もっと言うと、課題集中校には発達障害の子たちがたくさん入学してきています。そうすると、教育と福祉の接続が果たせなかった子たちが流れてくるという言い方もできるわけですね。

私はこの福祉以上就労未満の若者たち、教育と雇用の接続をしましょうということをご

っと言っているのですけれども、内閣府に来たのでこういう言い方をさせてもらおうと、文部科学省の仕事と厚生労働省の仕事がちゃんと地続きでつながっていかないとその間で落ちていくのですということです。私のやっている仕事は学校の中で文科省の枠の中で仕事をしているけれども、その後を見据えた厚労省的な仕事をして、ここに縦割りがあって、予算が流れてこなかったりだとかしていってしまう。今日、内閣府に呼ばれたのは非常にうれしくて、きっとそこをまるっとおさめてくださるのかなということを私は期待してここでお話をさせていただいております。

ちなみに横浜には6万人近い若者がひきこもりの状態にいるのに、若者サポート・ステーション批判ではありませんけれども、6万人の社会に出にくい若者がいるのに、年間で支援できているのは300人です。新規来所者数。一度学校という所属を離れてしまうと、私たち支援者は彼らにリーチすることができなくなってしまう。だからアウトリーチのために学校に入って行って、学校に入っていけば1日180人の若者をわしづかみにつかむことができちゃう。なので、学校の中で支援しているということです。

サポート・ステーション、都市型のサポステの特徴だと思いますけれども、15歳、18歳、22歳までの来所者数が非常に少ない。27、28歳からの来所者数が多い。私の仮説なのですが、この15~18歳、学校という所属を失った瞬間の支援がもしも一番高いピークのところに来ていれば右肩下がり下がっていくと思うのです。この子たちは非常に変容性が高い、成長する、くすぐると笑う、おだてると木の上に登ってくれる。私はずっとこちら側の支援を、今している方は今日来ているからわかると思いますけれども、この子たちはおだててもくすぐっても笑ってくれないし、木の上になかなか登らないのです。なかなか登らないというのはコストがかかる、時間がかかる、負担が大きいということです。

ここの支援をするのを止めましょうということではなくて、ここの支援をもっとこれから困る人への支援をちゃんとやっていけば、ここにコストがかからなくて済むのです。そこをしっかりやっていくべきなのではないかなと思います。

この辺は後で読んでもらいたいのですけれども、私たち支援機関が会う若者たちはこのような状態になっていて非常に支援が難しい。限られた予算の中で選択と集中という言葉がやたら使われると思いますけれども、選択と集中をするのであれば、これから困るであろう若者たちへ支援を集中するべきではないかなと思います。

この辺は基礎的な情報なので飛ばそうかなと思いますけれども、押さえないのは、子供の相対的貧困率が日本全体では15.7%なのに、シングルマザーになると50.8%にはね上がるということです。2人に1人、私が高校で相談する子たちは大体シングルマザーの御家庭のお子さん。そうすると、その子の将来の心配よりも今夜の晩御飯がちゃんと食べられるのかという心配をしてあげたほうがいい場合がある。帰ったら冷蔵庫に何も入っていない可能性がある。そういう子たちがそこにいる。ただし、その子たちが茶髪、金髪、つけてましてカラコンしてデコレーションしたスマホをいじっていると、大人は誰も貧困だなんて思わないのです。相対的貧困というのは非常に見えづらい、わかりにくい。でも、こう

やってデータとしてしっかりあると思います。

この辺は嫌味になるので軽く行きますけれども、日本は子供たちにお金をあまりかけていないので、お家にお金がないと勉強ができなくなっていくということです。お家にお金がなくとも教育機会が平等に得られるような国であればそういうことは起こらないけれども、日本では経済格差がそのまま教育格差になってしまうということです。

この辺も飛ばしますね。

今の「ぴっかりカフェ」の文化的シャワーというところのコンセプトのお話をしたいと思います。ピエール・ブルデューという社会学者が、文化資本、経済資本、社会関係資本、この3つの資本を持っている人は社会的に有利な立場に立つことができるということをして「ディスタンクシオン」という本の中で言っているわけです。逆に言うと、この資本、このカードのうちのどれか1枚でも持っていないと圧倒的に社会的不利になるということです。貧困というのは、この経済的資本というカードが奪われている状態、持てないでいる状態。経済的な資本がないとお金がないだけではなくて文化的な体験ができない。塾に行けない、参考書が買えない、映画を見に行けない。修学旅行に行けない。いろいろなことで文化的資本が得られなくなってくる。

私が思うのは、文化的資本というのは、例えば昨日「ぴっかりカフェ」に来た子供たちは、ワダさんという農家の方がつくったサツマイモを寄附してもらったオオニシさんというスムージーのおじさんが、米粉サツマイモケーキにして持ってきてくれて食べさせてもらっているのです。食べましたか。

松田氏 食べました。

石井氏 おいしかったですよね。

松田氏 おいしかったです。

石井氏 米粉の手作りのケーキなどは食べたことがない。手作りのケーキということ自体食べたことがないというのが文化資本のない子たちの特徴だったりするわけなのですが、彼らはサツマイモのケーキを食べておいしいと思った瞬間に、体から文化フックがよきんと多分生えたのです。例えばこれはないかもしれないけれども、「ぴっかりカフェ」の1発目のBGMはボブ・ディランの「ライク・ア・ローリング・ストーン」をかけたのです。ノーベル文学賞の人だと思わなかったと思うけれども、あの1曲でフックがすこんと生えた人がいるかもしれない。いい景色を見る、いい映画を見る、いい音楽を聞くと体がどんどんフックが生えてくる。文化的な人というのはフックがいっぱい生えているのです。私と松田さんは音楽的なフックがいっぱい生えているので、初めて会った日から仲よくなる。それはフックがひっかかり合うから、お互いロックのTシャツなどを着ていてビートルズが好きで、そういうところからフックがどんどんつながっていく。

貧困、経済的な資本がなく文化的な資本がないとフックが体から何も生えていないという状態だと思ってください。そうすると、何が起こるかということ、セーフティネットにもひっかからずにそのまま落ちていってしまう。だから、私たちはいかにあの場でフック

をその後の人生の糧になるようなフックをあそこで生やしてもらおうのかということがポイントかなと思っています。

日本には、最低限度の生活ができる権利があるわけですよね。生活保護というものがあります。ただし、あれはお金、経済的な資本の支援をしているだけであって、文化的な支援をしていないではないですか。彼らは社会的に孤立しているのです。文化的な資本がないと社会関係資本にまでたどり着けないのです。だから、お金の経済的な支援だけしていると、どんどん魂だけ奪われていって、いつまでも社会的に孤立していってしまう。

そうではなくて、私が考えているコンセプトはこの並びの順番なのです。文化資本が一番ベースにある。ちなみに、私が田奈高校で相談に乗っているケースの7割から8割は、私にお金があれば多分解決できます。でも、私にお金がないから解決できない。私はそのお金の支援ではなくて、そのかわり文化の支援をしよう。「ぴっかりカフェ」という、ぴっかり図書館という文化的な空間をさらにいろいろな人に入ってきてもらって、人、メディアをいっぱい呼んで文化的な体験をしてもらって社会関係資本にまたつなげていく。

そうすると、非公開求人に出会ったりとかするのです。今、ここで人が足りないのだけれども、あなた来ないとかね。社会関係資本がある人たちというのは、ここからお金につながっていくことができる。夢や希望にたどり着いていくというようなパラダイムシフトを起こしていくということが経済的資本の支援をそのまましていってもらいながらも、文化的な部分というものにもっとスポットを当てていかないと自立には導けない。これは早いうちに、子供のころから栄養のあるものを食べるとか、いいものを見るとか、そういうことが必要なのではないかなというように思います。

私はひきこもりの支援を10年間やってきてとても強く感じていることは、この人たちは親と先生以外の大人に会ったことがない人なのだなということを強く実感します。小中のどこかで不登校になってそのままひきこもりになれば、親戚の大人に会ったことも覚えていないぐらい、冠婚葬祭には当然出られなかったりするのです。親と先生以外の大人を知らない人たち。この人たちに対して、第3番目の大人、ロールモデルに出会わせるということがとても重要なことかなと思っています。

6年前に私が田奈高校に来て一番最初に出会ったケースは、1年生の男の子で、もう学校を辞めると5月か6月ぐらいに言っている子だったのです。先生も辞めないほうがいい、辞めるなと言っている、親も辞めるなと言っている。もうみんな諦めているし、本人も辞めると意思を固めている子が私のところに来て、そんな子が来て私は何ができるのだろうと思って、どうしたいのかと言ったら、学校を辞めて住み込みで働くと言って、ハローワークの求人サイトに入って16歳住み込みと検索をかけたらずゼロ件なのです。おまえ、ゼロ件だよ、やばくないと。私の知識を少し5分ぐらいして、やはり学校に残ったほうがいいのではないかというお話をとりあえずしたのです。大体5分ぐらい。

チャイムが鳴るまであと45分あるから、今、教室に戻っても気まずいだろうし、どんなバンドが好きなの、何を聞くのと言って、その子の好きなバンドのライブをYouTubeでずっ

と45分見ながら、結構いいねとかと言いながらお話をしている。チャイムが鳴って教室に戻るときに、明日からちゃんと学校来いよと一言かけたら、その子が次の日から学校に来るようになったのです。先生たちは奇跡だとかということを書いたのですけれども、私からすると、奇跡でも何でもなし、特別なことは何もしていないし、親と先生以外の、3番目の、親も言った、先生も言った、知らない初めて会った町のおっちゃんも同じことを言っていた。3本目の矢だったから刺さったのだろうな。その3本目の矢が飛んでこないところにいる子たちに対して、大人たちがその第3の矢をどうやって放っていくのか。でも町を歩いていけば高校生は誰も声をかけられない。コンビニで学ランを着てたばこを吸っていたら私は多分怖くて声をかけられないけれども、「ぴっかりカフェ」で信頼関係を積んだ子たちであれば注意することができる。そういう場を学校をプラットフォームにすることによって、サードプレイスの大人を地域を巻き込みながらやっていくということに意味があるのではないかなと思っています。

私たちがこの「ぴっかりカフェ」とか始めたときにすごく意識したモデルがこのレイ・オルデンバーグという人のサードプレイス理論という話です。男性が多いので注意しておきますけれども、家と職場の往復しかしていないお父さんが職場を定年退職する、あるいはリストラされてしまってセカンドプレイスを失うと、ファーストプレイスの家しか残らないのです。そうすると、団塊ひきこもりという状態になって、団塊デビューということにまた社会保障費が使われるようになっていくということが起こります。

ちなみに、セカンドプレイスを失ったファーストプレイスしかない50代の人の孤立死が今、男性で一番多いのかな。サードプレイスがないということがとても人生を豊かにしていないということです。このレイ・オルデンバーグという人は、都市生活を豊かにするためにはサードプレイスを持ちましょう。同じように、親が社会的孤立をしている子供たちはサードプレイスを持っていないのです。そうすると、学校を中退や進路未決定でセカンドプレイスを失うと、サードプレイスがなくなってしまってひきこもりの状態になる。なので、在学中にサードプレイスとどうつなげておくかということが1つ支援のポイントになります。

私はもう私が何をしようがどうしようがこの子はもう中退決定という子の相談を受けることがちょこちょこあるのです。もう今さら学校に毎日来てもだめみたいなのがある。そのときに私はきれいな辞めさせ方をしたいなと考えます。それはどういうことかということ、サードプレイスにつながった状態でセカンドプレイスをなくすということが私にとってはきれいな辞めさせ方。このサードプレイスがないまま学校を離れるというのが一番してはいけない学校からの離し方。それは学校からの排除が社会からの排除になってしまうからです。なので、このサードプレイスにどういうようにつなげていくのかということで私たちが考えているのが、この2.5プレイスモデルという考え方です。

学校に地域の人を招くと文化祭でファッションショーが始まる。あのファッションショーは、もう少し当日のお話をすると、着付けが全然できていなくて、9時40分からファッ

ションショーが始まって9時半から私は弾き語りギターで歌を歌っていたのです。10分たったらファッションショーが始まるのだけれども、50分とか10時にならなければ始まりそうもないから、石井さん、もっと歌ってと言われるのだけれども、全然準備していなくて歌を歌えなかったということがあるのですけれども、そのときに時間を間違えてきた地域のおばちゃん、スペースナナのおばちゃんが、その着付けに行っていたのです。彼女が、地域のおばちゃんが学校に来ていたから着付けを成立させてファッションショーが10時に始められた。それを見ていたおばあちゃんみたいな人たちが、裁縫とか手伝っているのです。涙を流しながら子供たちが輝いているのを見ている。それを校長先生が感心してそれを見ている。

校長先生に、校長先生、学校に地域のNPOを入れてカフェなどをやって、セカンドプレイス、サードプレイスの住人と会わせるとこういうことが起こるのですよ。学校にはもっと可能性があるし、いろいろなことができるはずだ。今度一杯飲みましょうということで、ノミネーションで引きずり込んでいってずるずるやるわけなのですけれども、そういうことが重要なと思います。

私が学校に入ったときに6年前に、これは内閣府のモデル事業のパーソナルサポートサービスという横浜の相談員で田奈高校に相談員として行くことになったのです。そのときに、個室を宛てがわれて個室の中に入ったら、私は機能できないな、自分のミッションを果たせないなと思ったから、学校の中を案内してもらったときに、一番開放的で素敵な空間だった図書館で相談がしたい。あそこで私は変なおじさんとしていたいのだということを経験先生にお願いしました。それは何かというと、スティグマの問題なのです。若ければ若いほど、学校という閉鎖空間であればあるほど、このスティグマというものに敏感にならざるを得ない。誰々が誰々に相談に行ったということがLINEで一気に流れます。私が入っている個室をロックして入ったところを見られたら、学校の中のうわさになるかもしれない。そうしたら、私は会いたくない人になってくる。私に会うことが恥ずかしいことになっていく。そういうことは絶対したくないなということで、このことを考えたのです。

スティグマは何で生まれるのだろう。それは自分だけが特別な支援を受けている状況が生まれたときにスティグマが生まれる。あるいは特定のグループだけが支援を受ける。そして、それがばれたらどうなるのだろうと秘密を持つということがスティグマ。負のレッテルとか恥辱とか書いていますけれども、では、スティグマが生まれない状況というのはどういう状況かということ、誰もが利用できてばれるという感覚を持たない。まさに図書館の居場所なのです。鎌倉の図書館、学校に行きたくない子がいたら、図書館において、ずっといてもいいよというツイートを流しましたけれども、図書館というのは誰がいてもおかしくない場所。誰がいてもおかしくない場所で若者支援の専門家と出会いながら日常会話を通じてお話をしていくということが大事なのかなと思います。

これは松田さんが出したのでスルーしますね。

私はあそこでドリンクを提供したりウクレレをやりながら、ちなみにこの間の内閣府のイベントで会った地方のNPOのスタッフが、石井さんはいつもウクレレだけ弾いていて楽しいよなと言ったのです。うちの団体の若手は、石井さんは楽しんでいる。あんなのずるいとか石巻方面で言っているやつらがいると言われて、なめるのではないぞという、私がどれだけのことをしているのだということなのですからけれども、私はそういうことを若者たちとしながら何をしているかということ、信頼貯金をためているのです。先ほどの松田さんのスライドの中にあったハッピーバースデーカップを持った子に私が行ってそこで歌を歌って上げて、ハッピーバースデーのあれから、私のつくったオリジナルの2番と3番があるのです。4番もあったかな。それを聞いて感動した彼女は信頼貯金がたまったのです。そして、その信頼貯金のたまった貯金の残高を切り崩して私のところに来てウクレレを教えてくださいと言ったのです。貯金がたまっていなかったら私のところなど来ないです。

私は、昨日も司書室でギターを張りかえさせられていましたけれども、張りかえさせられながら信頼貯金はまたたまったなということをやっているのです。決してあれは遊んでいるわけではないということを知ってほしいな。

この信頼貯金を貯める仕組みを誰も持っていないということなのです。誰も持っていない、サポート・ステーションは持っていないから、全然15~18歳まで来てくれないわけです。サポート・ステーションが学校の中に入って何か信頼貯金を貯める仕組みを持っていれば、15~18歳のあのグラフのあの部分が上がるのかもしれないですね。

では、地域の町のおばちゃんたちはどうやって信頼貯金を貯めるのか。学校に入ってドリンクを提供するだけでたまるのかもしれない。この信頼貯金ということがとても重要なキーワードで、この残高を使って起きたことが何になっていくのかというのは、予防支援なのでかなり先のことになるのです。

田奈高校のある先生が私に言ってくれた言葉ですごく励みになっていてずっと忘れない言葉があるのですけれども、「ぴっかりカフェ」でやっていることは、彼らが卒業した後に特別なことだときっと思い出すだろう。多分、いや高校はよかったよね、図書館に行けばお菓子があったしさ、何それという話になるのです。おまえのところはおかしいよみたいな話になってくる。そのときに、特別な支援を受けていた、特別に優しくされていたということに彼らは学校を出たときにいつか気付くだろう。そのときに、自分よりも若い子に優しくしようだとか、選挙にちゃんと行こうだとか、ちゃんと納税をしようとかというような気持ちになっていくのではないかと。私の出会っていたひきこもりの若者たちは、大人に優しくされた経験が一度もない子たちとも言えるわけですね。この信頼貯金を大人たちがためていく。子供たちがそれを返していってずっと社会が循環していくのではないかなと思います。

私がこの仕事をしていて私の中での理念としては、大人がひと手間かければ誰もが自立できるし、誰もが働けるようになる。でも、そのひと手間をかけていないから働けない若

者が生まれてくる。そのひと手間かけるということが公教育の中ではずるいということになっていくわけですね。でも、それは公正なのかとか、公平なのかとか、富の再分配で言えば勉強のできる上位校の子たちよりも下位校の子の学校には無料のWiFiが飛んでいて全員がiPadを持つべきなのです。そうやって富の再分配をしていかなければいつまでも格差は変わっていかない。その格差があるということで、格差の上の人たちが困っていくのだという、そこがもっと理解されていかないと相対的貧困ということが理解されずに貧困女子高生のうらちゃんたたかれるみたいなことになっていく。ここの部分をもっと成熟させていかなければ、私たちはこういうことをやってもいつまでも変わっていかないのではないかなと思います。

いつまでしゃべっていいのでしょうか。

司会 どうぞ。

石井氏 まだ大丈夫ですか。

司会 どうぞ、大丈夫です。

石井氏 いつまでもしゃべりますよ。

交流相談の場で起きているチャンクダウンという話をしたいと思います。漠然とした不安と言うではないですか。この間、私が聞いた言葉では、何とかと自分の娘がそういうことを言っている。それは漠然とした不安だか何とかな不安の略なのですけども、何となく不安だったかな。漠然とした不安という言葉よく使います。漠然とした不安とは何だろうと考えると、漠然とした不安というのは、不安の大きな塊です。これはコーチングの言葉で言うとチャンクという塊を指すのです。不安が大き過ぎて喉を通らないというようなイメージだと思います。こういう子たちに何か困っているかとか聞くと「別に」と言われます。

それは「別に」というのは、喉からつつかえて出てこないものをまとめて「別に」と伝える。「うざい」と言うこともあるし「きもい」と私も言われることもあります。それはチャンクが大きいからです。私たちが「ぴっかりカフェ」でやっていたりだとか相談室でやっていることは、この不安の大きな塊をチャンクダウンする。チャンクを粉々に砕いていく。これが傾聴だとか励ましたとか質問だとか、そういうカウンセリングの技術があるわけなのですけども、大きな塊が細かくなっていくと言葉として出てくるのです。

人が課題解決行動を起こそうと思うのは、漠然とした不安が明確な課題になったときに初めて行動に移すことができます。では、このチャンクダウンする機能が高校の中にありますかという、なかなか先生方が忙しくてない。大学の関係者とお話をしていると、キャリア支援センターをつくった、メンタルヘルスのセンターをつくった、学生相談をつくった、でも本当に来てほしい学生が来てくれない。それは漠然とした不安をチャンクダウンする機能を大学が持っていないからです。ここのチャンクダウンしてナビゲーションする人がいれば、支援センターは連日人でいっぱいになるのではないですか。ぜひそのチャンクダウンの仕事を私に下さいと営業しているわけなのですけども、そういうことをよ

くしています。

細かくしていくと、それは進路の問題だよ。では、今から一緒に奨学金が受けられるかどうか聞きに行こうとか、それは心の問題だよ、スクールカウンセラーに聞いてみようよ。体の問題、生理が来ないとか私は男性スタッフなのだけでも、割とそういうガールズトーク的な相談をよく受けたり、では保健室に行こうよとかそういう話をしている。では、家庭の問題やバイトの問題、学校が解決しにくい問題が出た場合、どうするのですかということになってくると、私のようなユースワーカーというか若者支援者は、横浜中にネットワークを持っているので、家庭の問題だったらこの人のところに行こう、バイトの問題だったらここに行こう。

先ほどの一緒にYouTubeを見ていた男の子は、その後、学校に来るようになったのだけでも、友達にももらった原付のバイクで事故に遭ったのです。そのバイクは保険がかかっていなかったのです。お金がなくなってくる。どうしようということになって、私たちのネットワークを使って弁護士さんに入ってもらって、それを解決しました。解決していく過程の中で、その御家庭は生活保護が受けられる状況なのに生活保護を受けていないから生活保護を受けるべきではないかといって、その世帯を保護に入れました。基礎的な部分とこのを固めていってみたい、学校の中ではできないことをしていく。あるいは学校にケースワーカーを呼んでケースカンファレンスをしたことがあります。そのケースワーカーが言ったのは、うちの福祉事務所で学校に来たのは私が初めてです。学校に来る前にみんなに頑張れよと送り出されました。終わってみたときに、こういうことはやるべきですね。福祉事務所に帰ったらみんなに言うておきますというようになっていく。

教育と雇用と福祉が分断されているのです。なので、学校の中で解決できない問題が起こってくる。学校の中で教育と雇用と福祉を横串に刺すような私みたいなワーカーがいるとそこがつながってくる。おとといたったかな。3日ぐらい前に私は学校に相談員でもなくカフェでもなく用事があって行ったら、若い先生が私を見つけて、「石井先生」と私のところへ来たのです。私、先生と言われると嫌なのですけれども、「石井先生」と言われて、今、何々が今日学校へ来たのですけれども、帰ろうとしている。ちょっと話してあげてくれませんかみたいなことが何でもなく私が学校にいただけで若い先生がそうやって頼ってくる。

用事があって用事を済ませた後にその子に会いに行ったら、その後が相談室でふてくされている。若い女の先生の話が熱血なのだけでも、全然入っていかない。私がその間に入って行って、そうしたら先ほどの金澤先生という人が、私が最初に「ぴっかりカフェ」に来たことがあるかと言ったら「ない」と言う。明日「ぴっかりカフェ」に来ないか、カフェの日だから。「行かない」。私、積水ハウスの歌を文化祭で熱唱したのですけれども、文化祭のとき、積水ハウスの歌、聞いたか。「聞いてないし」と言われて、箸にも棒にもひっかからない状態でどうしようと思っていたら、金澤先生が、石井さんはね、名字が3回変わっているのだよ。私は親が離婚とか再婚とかしていて、割と当事者性が高いのです。

田奈高校の方とすごいシンパシーが合う。そうしたら、その子も離婚を親がしていて、名字が何回変わったのと。うちは2回とかと言って、まだまだ2回じゃ甘いよとかという話をしながら、そこからその子と当事者性というのでつながって行って、では、明日カフェおいで、来たくなかったら、私はまた相談の時間をとるからやるよみたいな感じで相談をしていく。

話がそれましたけれども、結局その子は昨日学校に来られなかったのです。そんな感じで学校の中にユースワーカーがいるとなかなかおもしろいことができますよということなのですけれども、図書館というのはもともとちょっと困った子たちが来やすい、ひきつけやすい場所なのです。なので、司書さんは、運命的に困った子を発見してしまう。だけれども、発見したときの子供たちは、おそらく主訴をちゃんと言えない。訴えたい思いをちゃんと言えない、漠然とした不安を抱えているのです。そこでチャングダウンをしていくスキルがあるわけでもない中で寄り添ってあげるしかない。そうこうしているうちに、学校に来なくなってしまって、気付いたら中退しているなどということがよくあるようで、前に神奈川県和学校図書館司書さんの前でこういう講演会をさせてもらった後に、司書さんたちと懇親会をしたのです。そうしたら、次から次に私のところに司書さんが来て、ひざまずいて懺悔してくださったりとか、石井さんとかと言って、あのとき石井さんがいてくれればあの子を中退させなくても済んだとか、私はそういう子たちを何人も見るだけで何もしてあげられなかったということをしごく懺悔していたのです。

これは若者の支援の流れがあるのですけれども、困難を発見して支援に参加させる、誘導するという部分があって、支援を経て社会に出ていくという流れで若者支援というのは構成されているのだけれども、発見の次の誘導ができないまま、ここで止まっているから気付いたら中退となってしまった。私が今、学校に入っていることによって、この発見から誘導にその場でできてしまう。これがすごく大きいなと思います。先ほどの廊下で会った子が泣いてしまって、今日石井さんが来ているからとその場でもうダイレクトなパスが来て、そこでお話を聞いて、その場で関係性をつくっていくということができる。支援の参加の場というのは学校の中だけでなくもいいのではないかなということで考えています。出口では今日、お話ししていませんけれども、バイターンという仕組みがあって、そこへ乗っかって社会とつなげていくということをしているということです。

ということで、私のお話はここで一旦終わりにしたいと思いますけれども、ぜひ一度、今日お話を聞いた方は「ぴっかりカフェ」に遊びに来てもらいたいなと思います。来るときのルールは、何かお菓子を一品持ってきていただくととてもうれしいなという感じですね。私にメールをいただければ手配しますので、ぜひ来て、あの写真に音がついて動きがあるというところを見ると、本当に圧倒されながら過ごして、放課後のまったりした時間にああ良い時間だなということを感じられるのではないかなと思います。

どうもありがとうございました。

司会 ありがとうございました。

では、ここで少し休憩をとりまして、再開を3時45分からということで、その時間までにお集まりください。

(休 憩)

質 疑 応 答

司会 それでは、お時間になりました。質疑応答に移りますが、今のお話を聞いていますと、四角四面な質疑応答という形ではなくて、もうざっくばらんにコーヒーでも飲みながら、「ぴっかりカフェ」を再現したほうがいいのかなという感じもいたしますけれども、そういう気持ちで自由に御意見を戴いて討議していただければと思いますが、なかなかプレゼンの最中にいろいろなプレッシャーをかけていただくのもあまりなかったと思うのですけれども、緊張しますね。

私ども9月にお邪魔させていただいて、最初に見た瞬間からエプロン渡されて入らせていただいて、ずっと半日やらせていただきまして、いろいろな意味で気付きといいますか、勉強させていただきました。

今日皆様方から、石井さん、松田先生にもし御意見なり御確認したり御質問があれば御自由に発言いただきたいと思いますが、マイクをお持ちしますのでお手を挙げてください。いかがでしょうか。お願いします。少しお待ちください。

参加者1 幾つかあるのですが、一問一答の形のほうがよろしいですか。

石井氏 お好きなようにしてください。

参加者1 最初の質問ですが、生徒さんに対して、その「ぴっかりカフェ」というのはどういうところだよというアナウンスをされているのか、そこを知りたいです。

石井氏 してない。

松田氏 私は「今度、ぴっかりいつ?」「明日だよ」とか「来週だよ」とか、そういうような感じでやっていて、これは初めのときから実は何の説明もしていない。来れば石井さんがいて飲み物がただでもらえるよというような雰囲気が始まって、後付けで、この飲み物は何で高校にあるの、どうやって買っているのというように聞いてくる子が出てきて、そして、初めてどうやって説明しようかと話し合ったりして、それでできた説明図というものを今、石井が出そうとしています。ああいうものを最近つくったのです。

では、石井さん、説明してください。

石井氏 生徒はその辺、興味を持ってくるのです。石井さんはどうやって生活しているのとよく言われることもあったりもするし、豊富なお菓子、食べ物があったりすると、これはどこから来ているのみたいなことをよく言われるのですね。

今の私のお話の中でもスティグマの問題を出しましたけれども、施しを受けているみたいにはしたくないなというのがあって、まず、高校生の自立を応援する大人たちというのは社会にいたるのだよというのを、ここを一番知ってもらいたいなと思っていて、私は先ほどの先生と大人以外の親を知らないという若者たちにもっとこんないっぱいいろいろな大人がいるのだよ。大人の懐は案外深いのだぜというのが私が一番子供たちに伝えたいメッセージなのですね。

そういう大人たちがお金とかお菓子とか飲み物などをパノラマに送ってきてくれる。パノラマがそのお菓子とか物を使って「ぴっかりカフェ」を運営している。そこでみんなが笑顔になっているいろいろなことをおしゃべりしたりだとか悩みを相談することですてきな社会人や学生になっていって、君たちが今度は応援する側になっていくのだよ。この循環をつくるために「ぴっかりカフェ」はあるのですよということをオフィシャルにはこういう言い方でしています。ただ、これを前面に出していくという感じだと、彼ら的にはうざいみたいな感じに多分なると思うので、あまり触れずにやっている感じですね。

松田氏 なぜかという、やはりスティグマの問題なのです。できるだけ私たち、相談という言葉を生徒の前で使わないようにしているのです。相談と言うと、もう嫌だという子が結構いて、中学校までにもうそれでおなかいっぱいの子もいるのです。だから、相談という言葉にある種のイメージが付き過ぎているのです。だから、それをいかに言わないで気付かれないうちに、気付かぬうちに支援されているというそこに持っていきたいと思っていたので、聞かれたら説明をできるツールとしてつくりました。

石井氏 だから、そこでは自然発生的な偶然的な要素がすごく大きくて、その偶然をどう必然に変えていくかというブランドハプスタンスをどう起こしていくかみたいなことにいろいろな仕掛けがあるというような感じです。先ほど松田さんの話で西成の「となりカフェ」が出てきましたけれども、あそこだともう目的が相談ということが一本筋を通っているんで、逆に言うとソーシャルワークはしやすいのです。どういう状況かということの把握がしやすいし、子供たちにも懐に主訴に飛び込んでいくことができる。ぴっかりだとその辺が曖昧にすることがあるので、ソーシャルワークに持ち込むまでに丁寧に行っているというか、時間をかけているみたいなところに違いがあるのではないかなと思います。

松田氏 だからこそ、発見機能があって、本人も気付いていない課題、あとすごく手厚い高校なのに支援の仕組みがものすごくたくさんそろっている、こんな学校はないと思うのですけれども、この「ぴっかりカフェ」の交流相談の時代から通して見ていて、それでも落ちている子たちがいたということがわかってきたのです。だから、気付かれないうちが実は重要なかなと思います。

参加者1 ありがとうございます。

何となくわかるようなわからないような難しいところもあるのですが、そうすると、先ほどの説明の中で出てきた「どろっぴん」ですね。相談室、あちらとのつながりがどうなるのかなというところと、あちらが出てきたのは、既定路線で出てきたのか、それともカフェの中での相談では追いつかなくなってきたので後から付け加えたのか、そのあたりをお聞きしたいなと思います。

石井氏 もともと「どろっぴん」という個別の相談の仕組みは田奈パスという名前で学校の中にそもそもあったのです。それが「ぴっかりカフェ」に進化したという形になっています。この辺、わかりにくいかな。

松田氏 では、説明していいですか。前に内閣府の事業で、最初に来たときにはカフェ

ではなかったのです。週に1回、相談員として石井さんともう一人の方が来てくださっているということで、授業中は個別相談をして、そして、昼休みと放課後は図書館で交流相談をするというスタイルで、それを田奈パスという名前をつけてやっていっていたので、もともとセットだったのです。そういう交流相談と個別相談を石井さんがセットでやっていた。それを資金の目途がついて再開できるようになったときに、交流相談のところをカフェにしたことによって、そこだけをまず最初にやらざるを得なくなったのです。初めての試みだったので、いきなりそれプラス個別相談というように手が回らなかったこともあるので、だから、もともと発見した子たちをさらに深く支援するという仕組みは絶対必要なので、それで「どろっぴん」という仕組みを前と名前を変えてやっているという形です。

参加者1 ありがとうございます。

もう一つだけ。結構百何十人、200人来られると、生徒の顔と名前がなかなか覚え切れないかなとも思うのですが、覚えてらっしゃいますか。

石井氏 コアな子たちは覚えています。コアではない微妙な子に下の名前で、例えばユナちゃんとかと言ったら、それがユナちゃんではないことがあるのです。そうすると付き合い合っている恋人に違う名前と呼ばれたみたいな感じの嫌悪感をがっと私に示してきて「今、何て言った？」と言われたときに、名前間違えたなと思ったのだけれども、「もう一回言ってみ」とまたそこでさらに追い打ちをかけてきて、えっととか、そんな感じで一か八か言った名前が間違っていると信頼貯金が一気にゼロになりますね。だから、できるだけ名前を覚えるように努力はしていて、実は司書室の机の中に全学年の顔写真、クラスの写真と名前というのが全部あって、それで確認したりもします。ただ、カフェにぱっと来たときにはそうやって名前を間違えて彼女が彼氏に怒るみたいな、そういうのがよく起こる。

松田氏 昨日フルメイクだった子が今日はメイクしていないとか、もう別人ですからね。

参加者1 ありがとうございます。

司会 ありがとうございます。

私が邪魔したときも100人ぐらい入れかわり立ちかわりだったのですが、ふっと気がつくとも石井さんがソファのところで男の子と話し込んだりしている。周りの子たちは全然それに気付いていない雰囲気でした。ごく自然に相談に乗られている。たしかあの午後も2人、3人ぐらいには個別にぐっと入り込まれていたと感じているのですけれども、そういう状況があるけれども、先ほど御質問で、図書室のカフェに行って、何か弱いというか話したくない相談に乗せられてしまうみたいな認識は子供たち、生徒さんたちの間にはないですね。

石井氏 あると思いますし、それを待っている子たちもきつといるのだろうなというように、潜在的なニーズにリーチしているということもあるけれども、ニーズとしてあるのだけれども、出せずにいる子たちというところを本当に話したい子たちにどうちゃんとリーチできるのかということところが今、課題になってきているかなというように思っていて、それは人手が足りなくなってきたというのがあるので、もう少しお話ししなければい

けないし、私は暇なおじさんとして図書館にいるのが割とモットーだったのに、生徒に石井さんなんか忙しそうだしとかと言われてしまったりもしているのです。

司会 生徒さんたちは薄々行って声をかけられてくれて、実は言い出したいことがあるけれども、大人のほうから自然に触れられてほしいという思いを持っている子たちも多く来ている感じですか。

石井氏 そうですね。そろそろいいかなとか、よく来ているねみたいな話から始まったりだとか、あとボランティアさんで神わざ的に気付くとそういう子と話をしている普通のおばちゃんがいたりだとか、そこからまた話がフィードバックできて気にするようになって声をかけてみたりするなどということも。

司会 学校の先生に対する図書室でボランティアされている方に対する信頼貯金が自然にたまっていつてきていてそういう土壌ができていく雰囲気になっているという感じですか。

石井氏 そうですね。多分先生だとずっと会い続けているけれども、多分うちに来ているボランティアさんは割と一期一会感があって、だから言っている言葉みたいなこともあったりするのではないかなと思いますね。

松田氏 あとはやはり信頼貯金が教員には少なく支援者には、ボランティアさんには高いみたいに思われるのも違うかなと思うから発言するのですけれども、要するに忙し過ぎる大人を生徒は遠慮するのです。先生方ははっきりと忙しいのです。40人学級を30人にダウンサイジングさせてもらっている手厚い学校なのですけれども、それでも本当に先生方は大変なのです。忙しいなんてものではなくて、本来だったら私のような司書や保健室の養護教諭やこういう外部の支援者がゆったりして本当に雑談でもしていると寄ってきやすい。わかっているのですけれども、もう私たちも最近はずっと忙しいのです。その辺が課題ですね。その辺をたくさん来てくださるボランティアの方々が今、埋めてくださっているかなという感じはあります。

司会 忙しいということですね。

松田氏 そうです。

司会 私のほうで済みません。「ぴっかりカフェ」の延べ来所者数5,000人ですけれども、1日平均134人。全校生は何人ぐらいの学校なのですか。

松田氏 30人掛ける24クラスです。定員720人の規模の学校です。

司会 それぐらいいて134ぐらいの人たちが平均。いわゆるリピーターの方が大分占められているということか。そうすると、先ほどのふてくされた悩んだ子は行ったことないという話だったのだけれども、全体としては行ったことのある子は半数ぐらいだと。

松田氏 その調査をちゃんとしていないのですけれども、もちろんリピーターがいて御新規さんがいるという普通のお店のような状態ですかね。

石井氏 ちなみにPTAのお母さんたちが来てくれていて、PTAのお母さんたちの子供がぴっかりを利用していないというようにおっしゃったのです。そこから推測されることは何

かという、家がちゃんと居場所になっている子たちはびっくりなど来なくてそのまま真っすぐ家に帰っているのだなというのを感じています。

田奈高校に来て図書館に入っていて思ったのは、何でこいつら帰らないのだろうというのがすごくあって、私などは鐘が鳴ったら真っ先に学校から出たい、一服してしまうみたいな高校だったのですけれども、田奈の子たちは本当に帰らない。それは外に居場所がない、そこにしか居場所がない。お金を使わずにいられる場所、安心できる場所はそこにしかない子たちがこんなにいるのだな。その安心できる場所の中で安心できる大人と出会えるということの貴重さというのがあるのではないかなということを感じましたね。

司会 来場者数はどんどん増えてきているのですか。

石井氏 増えていきますね。認知度はどんどん上がっているし、でも、使い方も使いなれてきているような感じも受けますね。

司会 では、またフロアからお願いします。

参加者2 今日はありがとうございました。

先ほどの御質問で写真があるというお話だったのですけれども、それに近いことなのですが、生徒さんの個人情報に関して何か取り決めみたいなのは学校とあるのでしょうか。松田さんは学校の職員なので当然全て見られると思うのですけれども、そのあたり、何かあれば教えてください。

松田氏 学校のルールに従ってもらっています。必要であればそれは知らせないといけない立場にいますので、こういうルールというように改めて話したことがないのですけれども、これはちょっとだめだねとか、その都度その都度のケースでやっているという感じではないですかね。

石井氏 そうですね。だから、コンプライアンス的な問題ですね。それはウェブに出すものに関しては、顔は一切出していないです。できるだけぼかしは入れないように、そういうナチュラルな写真を出したいなということやっていて、そこに関しては特に学校から注意を受けたことは一度もないです。たまに際どいなと思うときは見てもらったりとか、いいのではないかとか言いながら出したりとかしている。このときには写真を撮らないでくださいねとか、そういうことをしながら外では笑顔を見てもらうような形で積極的に使っているという感じですね。それは例えばそのときに、金澤先生という学校の中の偉い方がいても別に何もおとがめがないのでいいのだなみたいな感じでやっている。

個人情報の取り決めに関してみたいなことが非常に緩やかに始まったということが私にとってはすごくやりやすかったです。例えばこういうことを言っているかわからないけれども、学校の中にパソコンとWiFiを持って行って相談室でYouTubeを見るなどというのはNGですね。でも、そういうようなある一線を越えたところで信頼ができていくことみたいなことを受容してくれる学校の中の風土がある中で、その一線を越えずに遊ばせてもらっているという感覚は割と常に持っていたりします。その辺がだから管理職の器みたいなところにすごく関係しているのではないかなという気がしますね。

参加者2 ありがとうございます。

済みません、どちらかというコンプライアンス的なことというよりは、この生徒さんが気になるなと思ったときに、要するに石井さんが事前にその生徒さんの家庭環境とかそれに関する情報のシートとかを先に拝見していればよりわかりやすいというか、早いのかなと思ったのですけれども、そういうところにおいて、例えばそれはどちらかというところの子は気になるなとなってから松田さんからこの子はこういう状況だよという生徒情報シートみたいなものを見させてもらってより深めた上で「どろっぴん」のときにはもうそれを見た上で取り組まれることができているのかなと気になったのです。

石井氏 そちらですね。そこで言うと、情報はほとんど来ていないです。私たちの中で言うと、初見というか、初めて見たときの印象でその子をしっかり見てあげたいな。前情報でこの子はそういうように盗みの癖があってとかではなく、出会えているということとしてのほうが意味はあるのかな。こちらで気になった子をフィードバックすると、いや、石井さんもそう思ったとか、実はみたいな感じになっていくことがあります。

進路変更までは行かなくてもある程度進路に方向付けをしてしまうようなアドバイスを行うような瞬間は学校にどういう指導が走っているのかなというのはすごく気にして、その瞬間を押さえることがよくあります。気になったからこういう方向で話をしていきたいのだけれども、あの子は今どういう支援をしているのかということが終わった後に確認すると、今、あの子はこういうようにやっているから、今それを言われてしまうとここまで積み上げてきたものが崩れるから、そのアプローチは止めてと言われることもあるし、学校がノーマークだったりすると、そのまま石井さんのその流れで進めてくださいなどということもあります。その辺は私の中でさじかげんとして押したり引いたりしているような感じ。そこを飛び越えて、ボランティアさんががっと言うみたいなことはいいのではないかなみたいな感じで、町のおっちゃんとして怒ってしまったとか、そういうのはいいのかなと思っています。

参加者2 ありがとうございます。

松田氏 関連して、やはりいろいろなところで生徒の個人情報にかかわることや、教職員でも共有するまでにまだその前段階として本当にコアな人しか知らないほうがいい情報というのは当然たくさんあるのです。そういうものを必要なときにどう共有していくかという仕組み作りも今、過渡期なのです。だから、すごくプロフェッショナルがそれぞれで支援しているのだけれども、実は同じ子をいろいろな人がやっちゃっているということも起こりがちなので、その交通整理をするポジションに先ほどの金澤とか、教育相談コーディネーターの中の一人をそれに当てるとか、そういった仕組み作りを校内でやりながらやっているところです。

司会 矯正施設の場合は外部の人がボランティアなりで応援に来た場合も、その入っている子たちの個人情報というのはかなりシビアに扱っているということがあって、支援する側からすればもっとその少年のことを知りたいのだけれども、施設のほうも教えてくれ

ない。教えてくれなければ具体的にここはアプローチできないのではないかというジレンマがある。そういうものが背景にあったの御質問ということで、今の学校側とすれば、生徒さんがみずから語る情報はそれはそれでいいにしても、こちらのほうから生徒さんの学籍簿であったり家族状況であったり、そういった情報に全部目を通すというわけではないというお話ですね。

では、ほかにいかがでしょうか。

私のほうから。最後に、当日のセッションといいますか、「ぴっかりカフェ」の状況についてボランティアの皆さんも含めて、こちらのほうではこの子たちがこのような振る舞いをしていたよとか、こんな悩みがありそうだったよとかということを経験共有されていますけれども、先ほど最初にパンドラの箱、そういう学校の先生にしてみれば難しい問題をあけてもらっているという話があるけれども、その共有した「ぴっかりカフェ」でわかった生徒さんたちの状況については、その都度、担任の先生なりに共有しているのですか。それとも、ここはしばらくこちらで押さえておいてやるのですか。先ほど言ったように就職の話などは学校は学校として積み上げてきたものがあるし、そことマッチングしなくてもいいかもしれませんが、微妙な問題がいろいろとあると思うのですけれども、そのあたり、どのように判断されたり積み上げていかれているものを少し具体的に教えていただければと思います。

石井氏 私たちが気付いたこと、発見したことに関しては、ほぼ包み隠さず一切全ての情報を提供しています。おもしろいなと思ったのが、また田奈高校的だなと思ったのが、大体生徒から聞いたディープな話とかをその話は先生にしたのかと言うと、大抵していない。だから、忙しくて聞けていないし、話していない。この話は大切なことだからちゃんと先生にも共有していいかなと断るのですけれども、私は断るのですけれども、そうすると、100%伝えていいと言います。言わないでと言った子は過去にいない。聞いてほしいと思っている。なので、私は全部伝えていく。その情報がダイレクトに先生へつながっていくのがいいのか、ここで一旦とめておこうかという判断は私ではなくて、そこに来てもらっている先生方にしてもらっているというのが実態です。

司会 ありがとうございます。

では、皆さん、どうでしょう。御質問をせっかくの機会ですので。

どうぞ。

参加者3 東京都もユースソーシャルワーカーという名称で若者支援の仕組みを学校に入れるという事業を今年度から立ち上げたところなのですけれども、例えば松田先生とか石井さんのような開かれた考えで学校にこういう形をつくらうという起爆剤になる方が全ての学校にいるわけではないという根本的な問題もありますし、先生方としては、まず先生としての職務への真面目さゆえに壁をつくってしまうということは大いにあると思うのですが、そのあたりを属人的な取り組みにしないで何とか根づかせていくためのコツとか何か秘訣のようなヒントをいただけるとありがたいと思います。

松田氏 これをやっている、やはりそういう属人的なことだから私にはできないわというような声が大半です。でも、これは自分の仕事のミッションをどう考えるかで、授業が大事ということが教員のあり方だとしたら、でも、おとなしく授業を聞いていても何もわからないとか、おなかがすき過ぎていて頭に入らないという子たちに自分たちのやり方で授業をするということは、本来の姿ではないですね。

それをどう気付いてもらっていかというのは、私や多分石井さんの課題なのだと思いますけれども、でも、少なくとも全ての学校にそういうことに共鳴しない人がいないわけではないというのはわかってきています。神奈川の中でも、共鳴してくれる人は複数、ピオトープのようにあちこちの学校にはいるので、例えば公立学校の宿命として、私や金澤教諭、管理職も異動していくわけなので、田奈高校でこれを何としてでも続けていくというやり方を考えてはいないのです。ほかの学校でまたぽっと咲けば、あるいはそれが複数咲けば支援される子は増えるかなというように思うし、そのための今、ケーススタディを私たちはやっているのかなというように考えていて、答えはないですけども。石井さんにマイクを渡そう。

石井氏 NPOのプレーヤー的な実施者としての目線で言うと、やはりNPOの仲間からは、石井さんだからできたという言い方をよくされるので、石井さんでなくなったときにどうなるのかということとはよく言われるのですけれども、私の考えていることとは、音楽好きなので音楽的な比喻でお話すると、ジャズ的なアプローチとクラシック音楽的なアプローチがあって、クラシック音楽的な譜面どおり、最初から最後まで間違えずに弾かなければいけないというのだったら、多分私でしかできないことをやっていると思うし、それを私のとおりにやるというのはもう負担だと思うし、ストレスだと思うし、できないと思います。

だけれども、私たちがやっていることはジャズ的なアプローチで、テーマの部分の入りはこうだけれども、ここの間奏部分はおまえが自由にインプロビゼーションで吹いていいのだよという部分がある。だけれども、ここ部分ではこういう決めを入れておこうね。最後はこういうように終わろうねというようにある部分が決まっていて、そこをやることは多分結構できる人は多いのです。その間のインプロビゼーションの部分はその人の個性で埋めていけばいいから誰でもできることなのではないかなと私は思っていますし、そういう人をしっかり育てていきたいなと思っています。

あと学校の人がかわるということも私はあまりネガティブに捉えていなくて、例えばパノラマ菌をその先生にくっつけて、インフルエンサーとして他の学校に移動していってもらって、「ぴっかりカフェ」というのが田奈ではとてもいい仕組みなのだよという形で、実際、私が入って6年たっているのもう結構多くの先生が異動しているのです。異動した先で管理職になっている先生などもいらっしゃるかとすると、校内連携みたいなことのイメージがついている方が管理職にいたりとかするのです。そこに話を持っていくともものすごく話が早くて、実際「ぴっかりカフェ」の2号店的なものが今、準備をそうい

う方の学校で進めているところです。

なので、なくならずにずっとやっていけるのではないかな。むしろ、そういった意味では資金調達をどう潤滑にしていけるのか、どこからお金を取ってくるのかとか、それに対しての成果をどういように見せていくのかみたいなことのほうがむしろ課題であって、そこを継続していくことに関しては、私は割と楽観的です。

松田氏 あと御説明していなかったかもしれないのですが、田奈高校の場合は図書館でやったということが非常に有効だったということが言えるのですが、超進学校でもこのような支援は必要だと思うのですが、もしもやる場合には図書館ではないかもしれないとか、それは方法論であって、方法論はそのインプロビゼーションの部分なので、子供たちの課題を解決して自立していく支援をするということのミッションさえ間違っていなければ、どんなやり方でもいいのかなと思っています。

司会 よろしいですか。ありがとうございます。

では、あともう一方くらい質問できそうですけれども、いかがでしょうか。

では、お願いします。

参加者4 私、社会教育を担当しているのですが、公立の図書館でこのような取り組みができないかなということを考えているのですが、このボランティアさんが131名いらっしゃるといってお伺いしたのですが、延べ数ではなくて本当の実数ですか。

石井氏 延べ数です。でも、多分実数に相当近いのではないかな。

参加者4 このボランティアさんに地域の中でも困ってらっしゃる生徒さんがいらっしゃるといような学校に来てもらうとき、ボランティアさんをお集めになったのかなというのを教えていただきたいのです。

石井氏 これは全部私の友達みたいな人たちだけで、一見さんはお断りしているというのが実際。女子高生がすごく短いスカートを履いていたりするような場所なので、ぱっと来たボランティアが盗撮してしまってそれがネットに上がるみたいなことになったら一気にもうパノラマのこの事業自体が潰れてしまうので、私の信頼の置ける方しか呼ばないようにしている。信頼の置ける方の友達とか、そういうようなクローズドなネットワーク。

横浜にはともえちゃんという変な名前の集まりがあって、教育と雇用と福祉の現場の連中が2カ月に1回くらい会って勉強会みたいなことをしているのだけれども、そのともえちゃんというのがFacebookのコミュニティーに流してボランティアを呼んだりだとか、あと横浜市立大学の教職課程で私が授業を何コマか持たせてもらっていて、課題集中校の現実などということをお話したときに、その市立大学の学生たちがボランティアに来てくれるとか、そういう本当に基本的に会った人たちを呼んでいます。それで昨日も10人ぐらいですかね。あそこのマスクの2人も昨日、大阪から来てくださっていて、その右側の方は共同通信の方で昨日「ぴっかりカフェ」にいらっしゃった3人なのですが、こんな感じで支援仲間とか、例えば今日ここで話を聞いたうちの2人が連絡して来てくれるのかもしれないし、そのような感じで常にボランティアさんは潤っています。

ボランティア養成講座というのをつくって、私の知り合いだけではいつか限界が来るから一般の方も入ってもらうようにするための仕組みも考えたのだけれども、それをしなくても充足しているというのが現状で、それはやっていないです。ただ、来年度から一般の、特に青葉区はすごくとてもハイソなセレブが多いので、そういう方たちに学校に入ってきてもらってお金を落としていってもらいたいなというように思っています。

松田氏 プラス、生徒のイメージを、地域の人に変えてもらうということもあるのかな。

司会 よろしいですか。ありがとうございました。

最後の資料に書いてある日程表をお持ちください。ここにいる、今日来てくださっている会場の皆さんはオーケーですか。

石井氏 はい。内閣府のこの研究会に出たと言っていたら、ぜひ来てください。写真で見ると本当に全然違うと思いますので、私が遊んでいるだけではないということをよくわかるので、皆さんぜひお越しください。

松田氏 違うのですよ。遊んでいるように見せるという高度な技なのです。

司会 では、そろそろお時間も迫ってまいりましたので、ここでお二人に、もしメッセージがありましたら、2～3分ずつでまとめていただければと思います。もしあれば、なければ。

松田先生は。

松田氏 たまたま図書館の視点からやっていますけれども、実は私たち支援者と図書館員というのはすごく似ているアプローチをするなと思っていて、それを石井さんはうまく草食系アプローチと言っているのです。司書の中にも肉食系がいるし、支援者の中にも肉食系がいるのです。肉食系とは何か。

石井氏 肉食系の支援者は、いきなり来たらばっとどうしたのだよとか、何かあるだろうみたいな感じでかかわっていくようなタイプで、草食系の支援者というのは待ちなのです。例えばこの間「ぴっかりカフェ」に来た方が石井さんはキャンプリダーみたいですねと言われたのだけれども、キャンプリダーはかなり肉食で食いついていって、踊ろうぜとか歌おうぜとか言えるのだと思うのですけれども、私は絶対そんなことはしないです。

例えばウクレレを置いておいて、私がウクレレを持ってウクレレやろうぜとは近づいていかなくて、ウクレレを置いておいて、ウクレレに興味持って持った子がぼろんと鳴らしたら、やってみるかとは私はそこに罫を仕掛けて後からやるのです。これは図書館という場がそういう場だと思うし、若者支援をしている居場所というフリースペースというのは、話さない自由がある、かかわらない自由がある、参加しない自由がある。その自由は、私はとても尊重したいのです。だから、こちらが主導的に何かをしていくというような場にはしたくない。それが司書さんと全く同じで、入ってきた、入館したのを目で見ながら、何か探しているな、よく目が合うなと思ったらお困りですかと近づいていくようなアプローチと非常に似ているところがあるのかなというお話です。

松田氏 それに学校図書館というところは必ずけもの道をつくらなければいけなくて、

入り口から私に見えないように奥に行けるように抜けさせられるようにしておく。そうすると、一年間はずっと一番奥の椅子に座っているのですけれども、それをずっとそのまま許容していくと、次の年には真ん中の席にちょっと出てくる。その次の年になってようやくカウンターに来て何か言いに来るといふこのスパンなのです。だから、単年度での評価は非常に難しいです。

石井氏 私は、31歳のときにたまたまハローワークに行って、たまたまとった求人ファイルのトップページにひきこもり、不登校の生活支援という求人票を見つけて、それまでひきこもりという言葉も知らずにこの業界に入って、今このように前でお話をして、起業までしてやっているのですけれども、これはひきこもりの支援の仕事を始めたときに、ひきこもりの若者の実際を知ってしまったのです。知ってしまった瞬間に私には責任が生じてしまって、その知ったことをどういふように解消していくかということです。ずっと来ているのですが、今日お集まりの皆さんも、学校の実態、高校生の実態を知ってしまったのです。この知ってしまったことを私たちはこういう形で責任を果たしているけれども、皆さんはこの知ったことを次のアクションとしてどういふようにとられていくのかな。それは「ぴっかりカフェ」にボランティアに来るのもいいかもしれませんし、町行く子に声をかけてもいいかもしれませんけれども、何らかのアクションをかけていただければうれしいなと思います。

司会 ありがとうございます。